

「いろいろことに」か、

「いろいろことに」か

奥村恒哉

古今集卷五、秋歌下、

題しらす

よみ人しらす

259秋の露いろいろにおけばこそ山の木の葉の千種なるらめ

右の第二句、類を見ぬ表現なので、議論のある部分である。筆者は『新潮古典集成 古今和歌集』において、

◇いろいろことに、「ことに」は「異に」であるが、「いろいろことに」は当時の表現としてはやや異様。伝本に若干の疑問もあるが、いちおう底本のまゝ、解することにする。

と記した。したがって口語訳は

木々を染める秋の露は、白一色に見えはするが、本当は各種様

々の色におくからこそ、山の木の葉の紅葉の色が千差万別に彩られるのだろう。

となった。

表現が異様なことは誰でも気づくことであるが、このまゝで解しても意が通じないことはないためか、本文を疑ったものは『打聴』『正義』以来、金子元臣『評釈』があるだけである。たゞそれで不自然さが解消するものではない。そこで注釈史をたどって考えてみることにしよう。

『八代集抄』では

山の木の葉は、色々にこくうすき、あるは、露の各別におくにぞあるらむとなり。

とする。『余材抄』では

菅万には第二句色こと／＼に……六帖は今と一同也。ことには異に也。

『余材抄』では、一応は本文への疑いを残したが、なお特別の判断を示した訳ではない。

賀茂真淵の『打聴』では

今の本には色々ごとにと有、古本新撰万葉等には、色こと／＼にと有。ことわりよろし。歌は上の白露の色はひとつをとよめるを表裏に云かへたるが如し。こと／＼は異々なり。

同じ著者の『続万葉論』も同内容である。掲出の本文は兩者とも

「色こと／＼に」と改めている。

一般的に、研究対象の本文の改訂は慎重を要するのは言うまでもない。それには、対象の本文と別の形の本文が然るべき場所に存在すること、が必要で、その形の方がいろいろの意味で筋が通っている、という両方の条件が整っていることが肝要である。今の場合は「古今」「新撰万葉」に別の形があり、その方が「ことわりよろし」と考えられる。という手続きをとっている。両方の条件を満たしているので、議論としては充分である。この議論についての批評は後述。

賀茂真淵の次には本居宣長『古今集遠鏡』が来る。『遠鏡』では本文をそのまゝに存置している。口語訳では

●秋ノ露ハタダ白イ物ジャトバカリ思ッテ居ルガ、サウデハナイサウナ。色々チガウテオクサウナソレデコソ梁ッタ山ノ木ノ葉ガアノヤウニサマ／＼ノ色デアラウ

右、補足すると掲出の本文に「いろいろことに」の「ことに」の右横に「清」と注しているので、「こと」は「毎」ではなくて、「異」の理解であることがわかる。傍線部は「歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり」（凡例）である。

次に『古今集正義』がくる。掲出の本文は「色こと／＼に」と訂正している。

二の句のいろいろことには不成の語也。色ことといひてたれるなり。たとへは人毎に山毎になといはんを人々ことに山々ことにとは、いふへからぬかことし。こは菅方に色こと／＼にと

あるそ正しき已上三首はみな露の一種をもて八千種に染わくるをあやしめいふかしむ意の歌也。

色こと／＼はそのもののものに随ひて色をほとこそすを云。秋の露はた、白しと見ゆれと、さにはあらてこれは赤也。かれは黄也。これは濃し、かれは浅しなと木々に随ひて置わたすと見ゆと云也。されは色それ／＼におけはこそと意得へし。委しくは冬の部の「誰かこと／＼わきて折まし」（注・三三六）の所にいへり。

○遠鏡に色々チカウテオクサウナと云るは非也。こはいろ／＼ことを色々の異なる意にとけれと、さるはいろ／＼におけはこそと云てたれり。重ねて異にといふへきにあらす。もとより語によりて幾重にも云ん事常なれと句調にまかする事也。色々異にと云詞は世にもいはず、た、色々と云にて異にの心あれば也。俗にも色々ちかうておくとはいはず。色々におくところ云めれ。

右に、「冬の部」と言うのは

雪のうちの梅の花をよめる

きのつらゆき

336梅の香のふりおける雪にまかひせはたれかこと／＼分てをらまし

のことで、その注に

……こと／＼は今それ／＼と云に粗あたれり。秋の部に秋の露色こと／＼におけはこそとあるも猶は檜楓は楓と露のそれ／＼

して色を施せるにこそと云也。紀氏の集に、「桜花ちらぬ
むならはなん色こと／＼に見つ、世をへん」とあるも、松
に縁、桜は花それ／＼面白き色をとこしへに見めてんものをと
桜のあたしきを惜める也。

『正義』の『遠鏡』に対する批評は承認せねばなるまい。「いろいろ
ことに」は語として成りた、ない、と言うのである。『打聽』と
は結果的に同じことになる。たゞ『打聽』の「ことわりよろし」と
言う内容が『正義』と同じことになるのかどうか、は分明ではない。
明治以降の注釈書では、前述の近世の注釈書以上に出たものはない。
通説としては、「いろいろ／＼ことに」を「色々異」とする『遠鏡』
の理解が行われているようである。しかし、この理解は『正義』に
批評されたように無理である。その主張をつづめて言えば、『正義』
の「いろいろ／＼ことに」は不成の語也。色ことにといひてたれるなり」
である。又、「たとへは人毎に山毎になといはんを人々ことに、山
々ことにといふへからぬかことし」ということである。「いろいろ
ことに」が語として不可であれば、「色こと／＼にとあるそ正し
き」ということになる。

我々としてはこのあたりで、諸本のあり様を点検しなければなら
なくなる。『古今集成立論』によってみると、

いろいろことに

私稿本、基俊本、筋切、元永本、靜嘉堂本、六條家本、永
治本、前田本、天理本、伝寂蓮筆本、雅俗山莊本、永暦本、

昭和切、伊達本
ということになる。

いろいろ／＼に

高野切、建久本

である。その他、本文を「いろいろ／＼に」として「いろいろこと
に」と傍注するものに

雅經本

がある。又、寂惠本では

いろ／＼^{コト／＼二俊}ことに

とする。この「俊」は建久本の形である。

古今集の諸本は以上の様になる。「いろいろ／＼に」の形は少い
が、高野切がこの形をとることは本文校勘上決して軽いものではな
い。高野切なるが故にその本文をもとの形だと考えては武断にすぎ
るが、例えば、諸般の要素を考えに入れて、高野切のみが古形を存
する例もある（拙著『古今集後撰集の諸問題』五七頁）。今の場合も
その様に考えてよいと思う。今の場合は雅經本と同形である。雅經
本が延喜の古今集の姿をよくとどめている本であることは言うまで
もない。高野切と雅經本との二つの重要資料の一致は尊重されねば
ならない。それは決して偶然ではないからである。

「こと／＼」を主張する『打聽』の場合、「ことわりよろし」と
言いながら、「ことわり」の内容を示していないことはやはり遺憾
である。『正義』の場合、述べられた根拠は説得力はあるが、現代

の目から見れば、や、粗である、と思われる。「ことくは今それく」と云に粗あたり」と言うが、この様に結論めいたものを突然示されても、我々としては、急に據り所とするのは、一寸不安である。

なお、『時代別国語大辞典上代篇』を見てみよう。
 ことごと【悉・尽】(名)どれもこれもすべて。全部。コトゴトで一括されるものごとが、連体修飾語として、あるいは直接に上接することが多い。下に対して副詞的に働くのは、この語の意味の数詞的な性格から当然のことで、それゆえまた副詞語尾ニを伴う場合もある。

わが率^{井ネ}寢し妹は忘れじ世の許登碁登に(記神代)
 悔しかもかく知らませはあなによし国内^{クナチ}許登碁等^{ことごと}見せましものを(万七九七) (以下用語例五例あるが略す)

この理解で、古今新の場合もほゞ釈然とするようである。「秋の露はあらゆる色におくからこそ」の意と解して誤りない。それは高野切・雅徑本の本文と適合する故に、「秋の露いろことごとに」の形が元来の『古今集』の形と認められる。

(一九八八年五月十日受理)